

序文

臨床経験の深い小児科医が保護者から子どもの病歴を詳細に聴取すれば、日常診療で遭遇することの多い子どもの病気の約7割を正しく診断することが出来るとされる。しかしながら、臨床経験が少ない小児科医や小児科以外の診療科の医師にとってはそのようなことは大変に難しい。病気の子どものしっかりと診察することが診療の基本であることは言うまでもない。特に、感染症に罹患した子どもでは、診察の際に子どもの口腔・咽頭、結膜、鼻腔、鼓膜などの所見と皮疹の有無・性状・分布をしっかりと観察することが重要である。麻疹のKoplik斑、突発性発疹の永山斑などが見られたら、病気の診断に大変有用となる。さらに、口腔粘膜の特徴的咽頭や扁桃の発赤や出血斑などの所見や皮疹の性状から、溶血性連鎖球菌を初めとする様々な感染症を診断することが可能である。なお、家族の者、保育施設・学校や地域で流行している感染症についての情報も診断の助けとなる。

近年は咽頭ぬぐい液や糞便などの検体中の抗原を比較的短時間で検出できるキットを利用することにより、外来診療の場で感染症の診断がこれまでよりも正確にできるようになった。しかしながら、こうしたキットを用いた診断法はあくまでも補助的なものであり、臨床所見が正しい診断の基本となることを忘れてはならない。

本書では日常診療で遭遇することの多い子どもの感染症を中心とした疾患の口腔・咽頭、結膜、鼻腔、鼓膜などの所見、皮疹、血管腫、便の性状などが適切な解説と共にカラー写真（CD-ROM）で示されている。一部の感染症では典型的な一時の所見だけでなく、経過に応じた病日による所見の変化もわかるように示されている点が他の書籍には見られない本書の大きな特徴である。

盛岡市で小児科医院を御開業されていた小川英治先生が永年にわたる小児科診療の御経験の中から収集された貴重な写真を本書では多数使用させて戴いた。本書が小児科医などの医療関係者だけでなく、子どもの育成に関係する様々な職種の方にとって大変に有用であり、広く愛読されることを願う。

平成24年

東京大学大学院医学系研究科小児医学講座 小児科 教授

五十嵐 隆